

<研究会報告>

新学習指導要領「世界史A」について

塚原 直人*

はじめに

第23回例会は、文部省教科調査官木下泰彦氏をお招きして、学習指導要領の今次改訂について、特に「世界史A」を中心にお話しいただき、その後質疑応答を交えることとなった。今次改訂における最も大きな変化は、いうまでもなく小学校低学年における「生活科」の新設と、高等学校「社会科」が「地理歴史科」（以下「地歴科」と略）と「公民科」に分けられたこと、「世界史」が必修となったことである。高校現場にいる著者としては、特に新設の2単位の「世界史」について関心があり、この例会に参加させていただいた。以下は、木下氏の講演と質疑応答の要旨であるが、論旨の通らないところ、言葉の足りないところはすべて著者の理解不足と不勉強の所産であることをお断わりしておきたい。

1. 講演要旨

(1) 今次改訂について

文部省の立場では、今回の社会科改訂を「解体」としてではなく「再編成」と考えている。いずれの立場に立つにしても、次の4つの考え方がある。①「解体」ととらえ、「地歴科」「公民科」を今までの「社会科」とは違うものとして否定する。②「解体」としてとらえるが、「地歴科」「公民科」の中に「社会科」がめざしてきたものを組み込んでいく。③「再編成」としてとらえ、「社会科」とは違うものを構築する。④「再編成」としてとらえるが、「社会科」の理念を「地歴科」「公民科」の中に取り入れていく。要は、「社会科」と「地歴科」「公民科」の関係を違うものとみるか、継承・拡充するものとしてみるかであって、現実的には後者の立場をとることが必要である。そのためには、今までの「社会科」に対する検討が必要であるが、高等学校の「社会科」について述べられた理論・方法論は少ない。高等学校「社会科」のめざした総合性は、経験主義と系統主義の対立の中で次第に変化した。昭和22・昭和26年版指導要領の「一般社会」昭和53年版の「現代社会」を除いて総合的な科目は設けられなかったが、分化・並立的な領域・分野を組み合わせることでバランスをとっていた。しかし、昭和53年版の施行以降、受験

* 東京都立秋川高等学校

など外部の要因から履修のバランス — いわゆる「世界史」離れなど — が生じ、「社会科」の総合性が崩れてきた。

今回の改訂では、「地歴科」「公民科」に再編成することにより、次のような利点がある。① 2教科に分けたことで、専門性・系統性・基礎基本を重視したこと。②科目構成のバランスをとるため両教科とも4単位必須とし、「社会科」的科目を重視、また、小・中学校でおこなっていない「世界史」を必修としたことで、公民的資質の育成と国際性を身につけさせられること。③ 教員の負担すべき領域を狭くすることで、専門性が活かせること。

(2) 「世界史A」について

昭和35年版指導要領での「世界史A」は「世界史B」を簡略化したものであったが、平成1年版におけるAは、Bの要約・簡約ではない。「世界史B」の通史に対し、「世界史A」は近現代(19.20世紀)を中心とする。が、小・中学校では世界史の枠組をつくっていないので、前近代についても2大項目を設ける。しかし、現行「世界史」とは構成原理を変え、各空間・時代を網羅・羅列的に教えるのではなく、隙間だらけにとり扱う。「諸文明の歴史的特質」では、たとえばキリスト教・儒学・漢字などを軸に文明史的な考え方を取り入れ、政治的な事件の取り扱いは最小限のものとする。「諸文明の接触と交流」では、2世紀、8世紀、13世紀、16世紀、17世紀・18世紀の各時代の中から2つ程選び、輪切りの世界史(空間的世界史)というかたちで扱う。この際、前近代については、世界史に幾筋もの軸があり1本化することは無理があるので、従来の事件史的扱いではなく、たとえばアナル派などの考え方を借りて全体をみるような扱いをしたい。

以上にみるように、「世界史A」は決して易しい科目ではない。

2. 質疑応答と感想

時間の関係で、講演は「世界史A」全般に及ばないまま終わってしまったが、質疑応答は活発であった。以下に、主なものを挙げておく。

- ① 今回の指導要領ないしは指導要領解説で、「歴史的思考能力」ということについての説明・規定はあるのか。—— 特に触れられてはいない。
- ② 「国際化」という場合に、「世界に対して身構える」姿勢と「世界に対して眼を向ける」姿勢とが考えられるが、今回の指導要領ではどのような姿勢を取っているのか。—— 後者の姿勢、世界との協調性を主眼としている。
- ③ 「世界史」・「日本史」・「地理」でそれぞれ4単位と2単位の科目が設定されているが、結局4単位のものは普通科、2単位のものは職業科というようになってしまわないか。また、「世界史」が必修科目となっているが、その必修科目が2種類あることに問題はないのか。

—— 2単位の科目を設定したことについては、選択の多様性を考慮したものであって、普通科・職業科の別を考えたものではない。

- ④ 「世界史A」の前近代の部分に関しては、各教科書で多様な記述が予想されるが、例えば教科書の検定に際して、どのような指導がなされるのか。 — 各教科書には、多様な記述・内容を期待している。

司会をした筆者の不幸もあって、質疑応答はまとまらないままに終わってしまったが、かなりの白熱した場面もあった。最後に個人的な感想を述べてみたい。まず、前近代の部分については、従来の「世界史」とかなり異なった視点でとらえていくことが現場に要求されることになるが、それが丁度「現代社会」が導入されたときと同じような混乱をもたらさないか、それだけに各教科書の記述内容によって教員や生徒の歴史観等を規定されることにならないかという一抹の不安を禁じえない。また、近代の部分については、講演および質疑応答で聞き損なってしまったが、これも従来の「世界史」とは異なり、単なる年代順の構成でなく、様々な視点で積極的に空間と時間を重複させているような構成が興味深く感じられた。いずれにしても、「世界史A」に、世界史教育に新たな動きをもたらさうる可能性を少なからず感じた。